

外国語授業におけるコンテンツ駆動学習の導入

田邊 鉄^{*1}

Email: ttanabe@iic.hokudai.ac.jp

*1: 北海道大学情報基盤センター

◎Key Words 大学教育, CLIL, 中国語授業, 入門期の外国語

1. はじめに

日本の大学における外国語授業では、学習者が当該外国語に対して高い学習動機付けを持っているとは限らない。抽選漏れなどで、意に染まない外国語を履修している学生にとって、外国語学習の初歩は、退屈な作業ばかりでできている。中国語学習は、発音と語彙に大きく依存するので、なおさらそう思う。

もちろん、大学の言語教育が、せいぜい数日の旅行で滞在中のサバイバルだけを目標とするならば、この方法を特に改める必要はないだろう。ただ、来る日も来る日も、教科書を音読し、単語を覚えるだけでは「興味を持たせ、それを持続する」ことは困難だ。

外国語授業が退屈なものにならないようにする方策として、近年 CLIL (Contents Language Integrated Learning) が注目を集めている。CLIL とは「外国語『を』学ぶ」授業から、「外国語『で』学ぶ」授業へとシフトすることを指す。

ところが、英語以外のいわゆる初習外国語で、「外国語で学ぶ」授業を実現するのは極めて困難である。英語ならば高校までの積み上げがあり、充実した授業を展開できるかもしれないが、初習外国語では難しい。「で」学ぶを実現するために、「を」学ぶことが、よけいに厳しくなっていくのでは、本末転倒であろう。

そこで、CLIL の C を再定義し、教科コンテンツを直接学ぶのではなく、希望するコンテンツを自律的に学ぶための多言語スキルを身につけることをコンテンツとするような、コンテンツ駆動学習を構築する研究・実践を着想、2020 年度から試験的に授業を実施している。

2. 外国語演習「インターネットで中国語」

北海道大学の初習外国語は、1 年次に週 2 回、合計 60 コマが必修である。例年およそ 800 人が履修、統一教科書で学び、学期末は統一試験がある。最終的には、ここに CLIL 的要素を導入する計画だが、非常勤講師を含む多数の教員が担当しているため、内容や方法をもう少し詰める必要があると考え、文系学部の一部で必修の、外国語演習科目で、人数を限って実施することにした。

授業は週 1 回、1 学期 15 回ある。各回のテーマは表 1 のとおりである。前半は「インターネットと大学図書館で、各分野の研究に必要な情報を収集するための方法」、後半は「SNS などでのコミュニケーションと、「中国語でのプレゼンテーション」を主に取り上げた。各回は、概ね次のように進行する。

2.1 ウォーミングアップ (5分~10分)

歌やドラマのワンシーン、中国式ラジオ体操、アニメの一部など、視聴覚教材を鑑賞、フレーズを発音してみたり、歌ってみたり、体操したり、決めポーズを試みる。

2.2 ミニ講義 (30分以内)

テーマに関して、「レファレンスの使い方」のような技術や、「中国の Web サイトに掲載された情報の読み解き方」などについて、教員が経験に基づいて話す。

2.3 実習 (30分程度)

講義で取り上げた、各種「オンライン・レファレンス」、場合によっては図書館の紙媒体も活用しながら、出された課題を解決してゆく。各種「チート技」の使用も認める。

2.4 発展学習 (自習)

自分が興味を持っている内容について、様々な「疑問」を考え、ネットを用いて、その疑問を解決する。また、自分で選んだオンラインテキストを、自動翻訳・音声合成・ピンイン (ラテン文字による“ふりがな”) 自動付与などのオンラインサービスを駆使して「自分専用教材」を作る。最終課題の「プレゼンテーション」の準備を兼ねる。

回	テーマ
1-3	○ これまで学んだ中国語の復習 ○ 中国語入力練習、中文IMEのいろいろ ○ 手書き・音声など多様な入力方法
4-5	○ インターネットと Web のしくみ ○ 百度ではじめる、中国語サイト検索 【実習】辞書・レファレンスサイトを利用する
6-8	○ 中国の政治体制/政府や自治体の Web 発信 ○ 地図・官職・文芸——昔のことを調べる 【実習】「工具書」サイトを使う
9-10	○ 芸能と文芸 ○ 中国料理 【実習】テキスト解析で教材を作る
11-12	○ SNS で中国のオタクと出会う ○ プログラミングで/を学ぶ中国語 【実習】オンライン・コミュニケーション
13-14	【実習】中国語でプレゼンテーション
15	プレゼンテーション実践 講評

各自、自分の興味に基づいて、インターネットから面白そうなテキストを発掘し、各種オンラインサービスを利用して、辞書で意味を確認したり、ふりがなをふったり、音声合成で発音を聞いたりして、あらゆるネットリソースを「教材」にできることを知った。また、KHCoder というテキスト解析ソフトを用いて、頻出単語を調べて集中的に学んだり、内蔵されている形態素解析エンジンを利用して単語単位で切り分け、Google スプレッドシートで単語集を作ったりした。

3. 最終プレゼン

こうして、検索や資料収集、分析などを通して、自分の興味ある領域の語彙や例文を中心に収集し、無理なく身につけることができた。最後に、それを用いて実際に中国語で発表をすることを課した。主たるテーマを挙げる。

- ・日本のアニメは中国にどのように受容されたか
- ・易経と占いについて
- ・中国発のビデオゲームについて
- ・中国語の歌は本当に声調を踏まえていないのか
- ・中国料理のプレゼンテーション
- ・少林寺について・・・など

最終回の発表は、ネイティブの TA とともに、プレゼン資料と実際のプレゼン、それぞれを 5 段階で評価した。特に 2 年目である 2021 年度では、必修クラスも全てオンラインだった、という学生が新 2 年生として履修しているので、発音が十分にできていないんじゃないか、と思っていた。ところが、蓋を開けてみると、発音がとても流暢な学生が多いことがわかった。

授業で発音練習はほとんどしていないが、音声合成を提供するサイトで練習しているせいか、正確で美しい発音をする学生が多く、驚かされた。面白いのは、Google 翻訳の音声出力機能と、そっくりな読み方をする学生が少なくないことである。ネイティブや教員が「ん？」と思うような、Google 翻訳の独特なクセまで再現している。ここまで似せるために、いったい、どれくらいの練習を積んだのだろう。クラスで一斉に読んだり、指名朗読することなどがあれば、その場で「正しい読み方」を聞くこともできようが、そういうインスタントフィードバックを得られないために、「とことんまで Google 先生の真似をすることになったのではないか。

4. 学力面の効果

2020・2021 年に、受講生が誰も受けたことのない、3 年以上前の統一試験問題を解かせてみたところ、だいたい 80% 程度の点数を上げていた。

これは、レギュラークラスで、1 年生が統一試験を受けたときの平均に近い。この授業以外では中国語から離れていたことを考えると、1 年生の時から、中国語の学力が落ちていない、と言え、少なくとも中国語を忘れない程度には保持できた、と考えてよい。だが、「この授業のおかげで、中国語の学力を落とさずにいられた」のか、「もともと成績優秀、かつ努力家で、1 年やそこらで中国語の実力が錆びないような学生だけが、この授業を履修している」のかは、これだけではわからない。

授業中の様子を観察した限りでは、大半の学生についてはどうも後者ではないかと思う。こちらから、いろいろ

なワザを教えたり、便利ツールを紹介したりすると、食いつきがよく、それを便利に使うだけではなく、私が紹介したサービスやソフトよりも、使い勝手のいいものを探し出してくる。その情報はクラスの掲示板等で気前よく共有してくれるので、授業をするたびに情報が厚くなっていく。

そういう授業は、多段階評価になじまないのかもしれない。スキル獲得が目的なのだから、どんなスキルをどれだけ身につけたのか、ということで測るしかないから、獲得スキルの数を単純に数えて、パス・ノンパス評価にしてしまえばよいようにも思う。どうしても段階評価をしなければならぬなら、ディストリビューションで考えるのがいいのではないだろうか。

5. 情意面の効果

学力よりも顕著だったのは、情意面での効果、モチベーションの維持向上である。自分ひとり、がむしゃらに頑張っている、人を出し抜いてトップに立つ、という競争原理から外れることで見える景色は、多くの学習者に心地よいものなのではないかと思う。

多くの学習者は、「調べ方」の選択肢の多さに驚き、「教材化」の容易さに感謝し、「言いたい中国語」が結果として言えているという事実にも感嘆する。

Youtuber のように、ネットでの発信を高収入に換えている人びとがいる一方、無償で人生相談に乗ったり、専門知識を匿名で披瀝したり、便利なツールを提供してくれるような人びともたくさんいる。昨今インターネットの「変質」を嘆く向きも多いが、この授業は、存外まだまだネットには牧歌的な部分が残っているのでは、と思わせるものがあるように思う。

6. おわりに

2020 年度に、この授業を受けた 3 年生の学生から、「この授業で教わったことを、1 年生の時に知っていたら、もっと苦労しないで中国語の単位がとれたし、もっと授業を楽しめたかもしれないのに」と、文句(?)を言われた。

なるほど、漢字の国の言葉なのに、いきなり「フリガナ」としてラテン文字の記号を覚えさせられる。你好(ニハオ、こんにちはの意)が、Nǐ hǎo と書かれ、でも、普通のローマ字や英語じゃないからね、というのは、あまりに意地悪なように思う。「サイトに全てピンイン表記をつけてくれるサービスがあるよ」と教えてやるのはマズいことだろうか。むしろ、面倒くさい「手続」のせいで、やる気や興味を失ってしまうことの方が問題ではないか。この授業で教えたような「便利ワザ」は、オープンにし、誰もが使えるようにした方がいいに決まっている。

授業に翻訳サイトを使うことの是非が議論されるようになって何年か経っている。そろそろ、機械翻訳が間違えそうなパターンを探すのはやめて、コンピュータをどう使い、どう分業していくか、を考え、この授業のような「リテラシ」「スキル」を学ばせる授業をさらに追求していきたい。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP18H00682 の助成を受けたものです